

コミュニケーション研究会 第7次テーマ「後進に伝えたいことごと」

『 孫に話す・・・戦争の頃の話 』

佐 立 弘 臣

平成 28 年 03 月 30 日

平成27年（2015年）8月15日

SEF コミュニケーション研究会

第7次テーマ 後進に伝えたいことごと」

【コミ研版】 「孫に話す・・・戦争の頃の話」

佐立 弘臣

今年（平成27年）は戦後70年、節目の年になります。戦後70周年に当たり、テレビ、新聞、本、映画など様々なメディアで戦争のことを取り上げられています。私（お爺さん、ここでは私と書きます）も子供たち（君たちのお父さん、お母さん）に戦争のことを話したところ、孫（君たち）にも聞かせてほしいと言われ残すことになりました。君たちはまだ小さいので、ここに書いて残します。皆さんが高校生頃の年齢として書きます。わからない所は両親に聞いてください。

私は5人兄弟姉妹の真ん中、誕生年は昭和15年（1940年）生まれですから、今年（平成27年）で75歳になります。今から話すことは約70年前のことです。人の記憶は何歳頃までさかのぼることができるのでしょうか。記憶は4～5歳ぐらいからでしょうか。私は4歳の昭和19年（1944年）から戦後の26年（1951年）ごろまでの記憶がいつまでも風化しないで残っています。これは、戦中、戦後復興の時、日本は今までに経験したことのない激動の中にあったことが、子供でも強く記憶に残っているのではないのでしょうか。

終戦の年、5歳ですから、表題を「戦争の頃の話」としましたが、正確には主に「戦後の頃の話」ということになります。4歳頃から小学生頃までの話をします。もちろん、その時は年号も、月日もわかりません。年号はその時の事柄を大きくなってから本や映画で知ったことです。私の記憶の風景からさかのぼり、社会の状況と合わせると、年号から何歳頃かなと推定できます。たとえば家族で逃げた日、あれが昭和20年（1945年）3月10日の東京大空襲の日、4歳だったというようなことです。思い付くままに書きます。

疎開の頃・・・昭和19年（1944年）

太平洋戦争が始まったのは昭和16年（1941年）12月8日、日本軍の真珠湾攻撃から始まりました。私は1歳でももちろん記憶はありません。初め良かった日本軍の戦局はミッドウェー海戦から一変し、敗北の度合いを深めていきました。昭和19年はさらに戦況が悪くなり、米軍のB29爆撃機による本土空襲が始まりました。

この頃の私の記憶では、ラジオ放送で「トウブグンカンク・ジョウホウハツレイ（東部軍管区情報発令）カントウチク〜・テッキシュウライチュウ（関東地区〜、敵機襲来中）」など放送されるのを意味も分からず、私がそれを口真似して家族に放送と口調が似ていると褒められた記憶があります。

昭和19年（1944年）の秋頃からでしょうか、本土空襲がひどくなり、疎開が始まります。東京の中心地、住まいの中央区は空襲、火災の危険から、強制的に地方に「疎開」をさせられました。多くの方は親戚などの縁故者へ疎開しましたが、学校毎の集団疎開（学校疎開）も多く行なわれました。当時、私の父は軍人でなく消防団員でした。軍人でない理由は父の軍人採用試験の時は軍縮の時代で、身体弱かった父は採用されなかったと聞いています。兄は当時13歳、中学生でしたが工場で働かせられていました。また姉は小学生で長瀬の方に学校疎開していました。

昭和19年、中央区は強制疎開で住めません。親戚が地方にないわが家は東京都世田谷区の叔母の家の近くに疎開したのです。その家は叔母の家から1ブロック西側にあり、道の角にありました。庭には桜、椿、こぶしの木々が沢山ありました。新緑の頃になると、門の側にある桜の木には沢山の毛虫が付き、出入りに気をつけた思い出があります。家の裏には竹林があり、その東の端に防空壕がありました。防空壕の高さは1.5メートルぐらいでしょうか、大人は立つてはいれません。幅も1.5メートルぐらいでしょうか、奥は2メートルぐらい。中には薄い敷物があり、じめじめしています。米軍機が来ると、空襲警報発令がされ、サイレンが聞こえると、防空頭巾をかぶって、防空壕に逃げ込み、座って、空襲が止むのを待ちました。長いと寝てしまいます。ある時、飛行機が飛んでくるのを見てると母に凄い勢いで叱られ、防空壕に放り込まれました。はるかに遠くに見える戦闘機でもすごいスピードで近づき、逃げまどう人を機銃掃射して殺してしまうのです。戦闘機のパイロットが見えたという人もいます。

*東京大空襲・・昭和20年（1945年）

昭和20年春、ビラが沢山、空から降ってきました。それを拾って母に持っていった記憶があります。私には内容はわかりませんでしたが、アメリカ軍機から大量にまかれたビラには空襲予告が書かれ、日本の降伏を促す内容が書かれていました。

その日、防空壕でなく母に手を引かれ森の中？に連れていかれました。夜になると遠くの方に真っ赤な空が見えました。長い間、燃えていました。その日が昭和20年（1945年）3月10日、東京大空襲だったのでしょうか。（調べてみると世田谷地区の空襲は5月25日とありますがどちらかわかりません）。私はその夜は森の中で過ごし、朝に自宅に戻りました。

叔母の家が焼かれ、近所も焼かれていたのですが疎開先のわが家は燃えてなかったのです。我が家には近所の人たちが集まり、炊き出しをしていました。

3月10日、東京大空襲。東京の中心一帯が焼け野原となり、一夜にして10万人もの尊い命が失われました。それまでは高いところからの軍需工場など目標地点を狙った爆撃が主でしたが、無差別爆撃が連夜のように行われ、焼夷弾が雨のように落とされるようになりました。その後、地方都市にも爆撃が行われ日本は壊滅的打撃を受けたのです。

通常の爆弾は発生する爆風や飛散する破片で対象物を破壊しますが、焼夷弾は中に入っているもの（焼夷剤・ガソリンのような物）が燃焼することで対象物を火災に追い込む爆弾です。日本のような木造建物などを焼き払うための爆弾です。また、クラスター型焼夷弾といい上空で100本ほどの子爆弾に分かれる型があり、六角形の子爆弾に火が付いて雨のように降ってきて建物を燃焼させ、人に刺さります。私は戦後、六角形の直径が約10センチ、長さが約50センチの焼夷弾の殻を近くの原っぱで拾った記憶があります。

8月6日、広島原爆投下で死者約12万人、8月9日、長崎原爆投下で死者約8万人となり、8月15日に終戦を迎えました。

*玉音放送

昭和20年（1945年）8月15日、家で玉音放送（天皇の肉声（玉音）を放送すること）を聞きました。もちろん私にはそれが玉音放送とは知らず。暑い日で、私は庭で遊んでいました。ただ母、近所の人々が、ラジオの前に正座して、涙を流して聞いていたことが記憶にあります。戦争は終わりました。昭和20年、日本中の、およそ120の都市が爆撃を受けました。六大都市や工場地帯はもとより、地方の中都市も、文化都市も、市と名が付くところはことごとく爆撃を受けたのです。市街地は焼夷弾で殆ど焼けてしまい多くの方々が亡くなりました。私の小学校には父親がいない友人が沢山いました。

*小学校

昭和21年（1946年）の4月、小学校に入学しました。知っていますか、早生まれは1月1日から3月31日でなく、4月1日なのです。私は4月1日生まれなので5歳の最後の日（6歳の最初の日）が入学式でした。校舎は木造の2階建て、コの字型に配置されていました。私は1年1組、東側にある校門から一番近い教室で、コの字の先端の1階にありました。その頃は出席簿が年齢順になっていたのでいつも最後に呼ばれ、初めての先生には私の苗字が読みにくいので、なんと読むのかの説明から始まりました。

教科書はカタカナで書いてありました。最初の第一ページは 「アカイ。アカイ。」「アサヒ。アサヒ。」教科書は、戦前の軍国主義的なところが全て墨でぬりつぶされ、真っ黒に線が引かれていました。小学1年生の時は男子、女子は別別の各2クラス、計4クラスでした。2年生から新学校制になり、男女が一緒のクラスになりました。学校制は高等小学校がなくなり、小学校は6年生で終わり、新制中学校が誕生しました。元々あった中学校は高等学校に格上げになり、昭和22年（1947年）から、今の6・3・3制が始まりました。

私にとって小学校時代は最悪の時代でした。クラスで一番若い（幼い）こともあり、言い訳かもしれませんが、戦争で幼稚園に行かれず、本も満足にありませんでした。今のような塾はありません。ですから私は劣等生でした。宿題を忘れ（わからなかった？）怒られ、いたずらをすると教室の外に立たされます。立たされ坊主でした。その頃は体罰もありました、ビンタです。顔から火が出そうでした。授業が終わると教室の掃除があります。今でもあるかもしれませんが、当時は教室の中の掃除、教室の外の廊下拭きがありました。その後に放課後の追加授業がありました。授業を受けるグループに必ず私は入っていました。そのためか、70年経っても1年1組の先生の名前がすぐに出てきます。

小学校は木造でしたが焼けなかったせいか、机、椅子はありましたが、中学生になって1年の時は教室に机も椅子もなく教室の床に座って授業を受けた記憶があります。戦後7年経っても物資がなかったのです。当時、校舎は木造で教室が足りないため、一教室を二学級が使うという「二部学級」がありました。別々のクラスが午前と午後に分けて授業をおこないます。一週間ごと交代して使ったこともありました。また校舎がない地域では、焼け残った大木の本陰や原っぱに子供たちを集めて、「青空教室」での授業が行われました。地面をならして字を書くことから始まったのです。

5年生の頃（昭和25年・1950年）からでしょうか、アメリカからの食料援助が始まり、学校では毎日給食が出るようになりました。覚えているのは米国支給の脱脂粉ミルクで、臭くて、口の中に粉が残り不味かったことです。その頃は食べるものがないので学校の周辺に出かけ先生の言う食べられる草を集めました。イナゴなども取り食べました。今の給食は美味しいと聞いていますが、当時の給食はまずかったけども、お腹がすいて贅沢なこととも言えない時代でした。

6年生の時、（昭和26年）アメリカのマッカーサー元帥（当時、連合軍最高司令官）が更迭で本国に帰る時、日本の食糧事情が良くなったのはアメリカからの食料援助を決めたマッカーサーのお陰と、「マッカーサー有難う」のお礼の作文を書いた思い出があります。

小学2年生（昭和22年・1947年）か、3年生の時、校門の右にあった高さ3～4m、幅が2～3mの「堂」が壊されていくのを見た記憶があります。「(昭和) 天皇陛下」の御写真（「御真影」（ごしんえい）と言う）を納めておくお堂です。後で調べたら「奉安殿（ほうあんでん）」と言うそうです。

当時の校庭によくある銅像は薪を背負い読書をする「二宮金次郎」です。その姿を手本にしてしっかり勉強してほしいという理由からでしょう。二宮尊徳（通称金次郎）は江戸時代の終わり頃、貧しい農民で、大変苦勞して勉強し、藩の農業を立て直し農民思想家として高く評価されています。明治27年（1894年）に内村鑑三が書かれた「代表的日本人」（Representative Men of Japan）の5人の中の一人が二宮尊徳です。ほかに、西郷隆盛（政治家）、上杉鷹山（地方大名）、中江藤樹（地方の教育者）、日蓮上人（宗教者）がいます。5人に共通するのは、私事を捨て、公人として献身的に人生を捧げたことです。この時期、明治33年（1900年）に新渡戸稲造の「武士道」“Bushido”、明治39年（1906年）に岡倉天心の「茶の本」”The Book of Tea”、3冊が共に日本人が英語で書き、日本人の生き方、精神構造、日本文化を世界に発信しています。日本人が書いた本が逆に邦訳され出ているので、読んでみてください。

小学生の時、DDT（殺虫剤）の撒布がありました。当時の日本人の衛生状態は悪く、女の子は髪にシラミがつき、米軍は小學校生にDDT消毒を月一回ほどするために来ていました。スプレーからDDTの粉が噴出し頭から全身に吹き付けられ真っ白になりました。

当時は化学肥料があるわけではなく、肥料は堆肥か人糞です。トイレは全部くみ取り式。くみ取ったし尿は畑の肥料になりますから、農家のおじさんがリヤカー（2輪の荷車で人もしくは自転車によって牽引して使われる。「後部（Rear）に位置する車」の意でリヤカーと命名された和製英語）か、牛車に木製の肥桶をいくつも載せて汲み取りにきました。その頃、世田谷に牛車は走って？いました。そのため糞尿から野菜についた回虫、ギョウ虫卵が私たちの体の中に入り込むのです。便と一緒にふ化した回虫やギョウ虫が出ることもあったし、寄生虫駆除の薬を飲まされました。いろいろな場所に回虫でお腹がいっぱいの怖いポスターが張られていました。今と違って、その時代はすべての野菜は無農薬だったのです。

自宅に風呂がありましたがもちろん燃料は今のようなガスではありません。燃料は薪です。薪を割り、釜の前に座って良く風呂を沸かしました。昭和28年（1953年）、私が中学生になった頃でしょうか、テレビ放送が始まりましたが家庭ではテレビは買えません。父や兄と一緒に銭湯に行き、帰りにカキ氷のお店で食べながら、テレビを見るのが楽しみでした。たしか、力道山のプロレス、プロ野球の中継ではなかったでしょうか。そう、銭湯に行く途

中、家の近くにはフクロウが鳴いていました。世田谷はまだ田舎でした。街頭テレビが流行ったのはこの頃です。

木炭バス（木炭自動車）が走っていました。良く乗るバスは渋谷から世田谷までくるのですが、途中の坂が上れずに、乗客は皆降りて坂の上まで歩きます。大人達はバスを押していました。

外出してつらいことがありました。駅の近くには「戦争にあって、怪我をしたひと」（「傷痕軍人」）の方が必ず立っているのです。立っている前の地面に、ブリキの缶や箱が置いてあります。また、駅には靴磨きの少年が沢山いました。父親は戦死か、消息不明の家庭の子です。今ならいろいろなバイト先もありますが、彼らはまだ小学生か中学生ぐらいです。当時、収入源といえば、男の子なら靴磨きか、新聞配達でした。親のいない子供達は戦災孤児になり、浮浪児になる人もいました。戦争はいろいろな不幸な人々を残しました。

「傷痕軍人」というのは戦傷を負った軍人のことです。戦争が終わった時、海外のいろいろな地域に残された方々がいます。その数は、軍人が330万人（復員軍人（復員兵）と言います、傷痕軍人はその一部です）、一般の人が300万人以上といわれ、これらの人々は、短期間にしかも一斉に帰国しなければならなくなりました。これを「引き揚げ」といい、この人たちの速やかな帰国は緊急課題で、昭和20年9月から、軍港だった舞鶴港をはじめ、国内の十数港を引揚港に帰国が開始されました。その中で舞鶴港は昭和25年以降、国内唯一の引揚港として最後まで重要な役割を果たし、「舞鶴」の名が全国に広まりました。

海外から帰ってきた多くの人は日本の港に着いても家は焼かれ、家族がバラバラで再会することができません。今では、テレビ、スマホ、インターネットで、顔もすぐにわかり安否、再会も多くの時間を要しませんが、当時は「引き揚げ者名簿」を作られ肉親を探します。またラジオ放送に「尋ね人」の番組がありました。連絡が不能になった人物の特徴、消息を記した手紙をアナウンサーが朗読し、消息を知る人や、本人からの連絡を待ち、再会を果たすのです。

昭和20年（1945年）8月8日、ソ連は日ソ中立条約を破棄し対日宣戦布告し、8月9日から樺太、満州、朝鮮半島への侵攻が始まりました。8月15日に終戦になりましたが、ソ連軍の攻撃は終戦後も続き、日本は北方領土を占領されました。現在も国後、択捉、歯舞、色丹の北方領土問題が続いてるのは、これが原因です。満州にもソ連の大軍が侵攻しました。満洲とは今の中国東北部のことです。北朝鮮に接しています。日露戦争の結果として、日本は南満洲鉄道の権益を手に入れ、中華民国から租借した関東州（遼東半島の先端部分）を足がかりとして満洲地区に乗り出したのです。その満州にいた軍隊が必死に防戦して大量の民間人を日本へ脱出させましたが、逃げ遅れた民間人や軍兵はシベリアへ抑留されました。

シベリアに多くの人々（約50万ともいわれるが定かではありません）が労働力として移送され、抑留生活と奴隷的強制労働が行われました。昭和22年（1947年）から日ソが国交回復する昭和31年（1956年）にかけて、抑留者の日本への帰国が行われました。また約6万人（この数も定かではありません）の方がたが亡くなり、現在でも毎年夏に現地で抑留中の死亡者の遺骨収集が進められています。

*食べ物

食料は戦中も少なかったですが、戦後は更に少なくなりました。外地にいた兵隊さんが日本に帰還したこと、農地は戦争で荒れ、また働ける人も少なくなっていたこともあるでしょう。食料がないのです。今のような食べ物が沢山ある生活からは想像もできないでしょう。国は食糧を配給制度で配る計画がありましたが食料がないので配給できません。私たちは「ヤミ米」「ヤミ物資」を求めなければ生きていけない状態でした。

「買出し列車」という言葉がありました。都市と田舎を結ぶ列車には、農家を何軒も回り、分けてもらった、米や芋をリュックサックいっぱい詰めて、家で待つ幼い子供の喜ぶ顔を考えながら運んでたお母さんが沢山いました。当時は貨幣価値が無く、お金より物でした。焼け残った思い出の着物とか、指輪とか持って行って、物々交換で、食べ物を手に入れました。ある資料に、昭和20年（1945年）の敗戦直後の公定価格と闇価格の参考数字が載っていました。米1升（1.8リットル、約1キロ）公定価格 53銭（0.53円）、闇価格 70円、132倍、サツマ芋 1貫目（3.75キロ）、公定価格 1円20銭、闇価格、50円、42倍、砂糖、1貫目（3.75キロ）公定価格 3円75銭、闇価格1000円、266倍とありました。当時、米高く、特に砂糖はべらぼうに高かったのです。我が家の両親もそうやって食べ物を確保していたのでしょう。今思うと大変な苦勞をかけたのだったと感謝しかありません。

主な食べ物はサツマイモでした。お米は全く手に入らない、入っても少量でサツマイモに少しのお米です。今のような甘いサツマイモではありません、収穫量の多いまズいサツマイモです。スイトンが一番の忘れられない食べ物です。母が捏（こ）ねたうどん粉を手でぎゅっと握って団子状になったものをそのまま醤油味の汁の中に入れたものです。野菜は入っていません。出汁も、醤油も今のような美味しいものではありません。すこしでも腹に入れば良しとした時代の食べ物です。米は配給でまったく精米されていない玄米でした。そのため、玄米を一升瓶にいれて棒で突き精米にします。人間精米機です。この作業は子供の仕事で長い時間がかかり疲れます。出た糠も小麦粉に混ぜて食べます。

まだパン屋はありませんでした。もちろん自宅にパン焼き器などというの也没有。我が家では叔父さん来た時、長方形の筆箱より少し大きくした高さが5センチほど木で作った箱でパン？を作りました。箱の短い方の両端に電極と称し鉄板？を置き、箱の中にパン生

地を入れる。パン生地と言っても、小麦粉か？フスマか？にサツマイモを入れたもので（割合はわかりません）、イースト菌などは勿論なく直接100ボルトの電源を入れて作ります。当時はそれでも暖かいうちに食べるとおいしいのです。母は感電すると言い、怖くて作りませんでした。

中学生になった頃、アメリカからの供与の小麦粉（メリケン粉と言っていました）の輸入により、小麦粉が出回り、街にパン屋が出来始めました。今のような沢山の種類のパンはありません、皆さんの好きなブドウパンもメロンパンもありません。でもパン屋に行きコッペパンを買い、それにクロックを挟んで食べる。その味の美味しかったこと、未だに忘れられません。

当時は今のような電気冷蔵庫はありませんでした。我が家にあったのは外が木造の冷蔵庫で一番上の棚に氷を入れ、下部に食べ物を入れる木製氷冷蔵庫でした。氷はリヤカーで氷屋さんが家に配達してくれます。でも夏など暑い日は家まで届くまでに氷は溶けて小さくなってしまう。

昭和24年（1949年）、小学校4年生頃からでしょうか、キャラメルが発売されました。カバヤキャラメル、グリコのおまけ付きキャラメルもありましたが、最も覚えているのが、紅梅キャラメルです。たぶん当時、紅梅キャラメルの工場が世田谷にあったこともあるのかもしれない。巨人軍選手カードのおまけ付きキャラメルで、子供たちは選手のカードを集め、野球道具に交換できるこのキャラメルが「野球は巨人、キャラメルは紅梅」でブームになりました。当時の巨人は水原監督、赤バットの川上、千葉、青バットの青田の時代です。プロ野球は終戦の翌年の1946年には再開されましたが私は街頭テレビで試合を見た記憶がありますが球場に行った記憶がありません。現在も投手に贈られる「沢村賞」は伝説の巨人の沢村栄治名投手の功績を称え作られましたが彼は戦死しています。

食べ物ありませんでしたがタバコもありませんでした。当時タバコの形では手に入らず、タバコ巻器という簡単な道具があって、海苔巻きを作るように紙を置いて、たばこの粉を薄く敷き、端からクルクル巻いて、紙の端に唾をつけて、キュッと押さえて、一本のタバコを作って、タバコの好きな大人達は楽しんでいました。

*遊びのこと

当時、同年代の子供達が沢山いました。今のように、テレビ、パソコン、ゲーム機、携帯電話、そうLINEも、そして塾ありませんでした。また今のような公園にブランコ、滑り台のような立派なものはありません。子供たちはメンコ、ベーゴマ、ビー玉、釘刺し、竹馬、缶馬、輪まわし、馬跳び、チャンバラごっこなどで遊びました。遊び道具は釘、メンコ、空

き缶、木切れなど簡単なもので子供たちは遊びを創造し、外で遊ぶことが普通でした。また、遊ぶ場所として焼け跡にまだ家も建っていない広場が沢山ありましたから困ることはありませんでした。

*紙芝居

近くの前には自転車に紙芝居を積んで拍子木を鳴らし、紙芝居のおじさんが来ました。

「紙芝居」の楽しみは駄菓子です。始まる前に良く二本の棒についた水飴を買い、棒をグルグルまわし水飴を白くして食べながら紙芝居を見ます。紙芝居の内容は時代物だったか良く覚えていません。唯一名前を覚えているのは「黄金バット」というタイトルです。

*アイスクャンデー

当時はアイスクャンデーがありました。今でもありますが、当時は水にサッカリンなどの甘味料などを混ぜたものをブリキの管に入れ、割りばしを挿して凍らせただけのものです。今では衛生に問題ありと許可されないでしょう。アイスクャンデーは自転車で売りにきます。荷台に大きなふたの中央に手が入るくらいの小窓があり、アイスクャンデーの取り出し口になっています。暑い夏の日には遠くからチリンチリンとハンドベルを鳴らしながらやってくるアイスクャンデー売りはその頃の夏の風物詩でした。

*お祭りとお店

世田谷の自宅近くには寺・神社が多く、招き猫で有名な豪徳寺、吉田松陰の松陰神社、若林神社、太子堂神社などがあり、お祭りの開催日が少しずつずれているので、秋になると、子供たちはお祭り、縁日に毎週のように何回も行くことができました。「お祭り」にはかならずお店が出ました。もちろんそれがお祭りに行く目的です。夜になると縁日のお店は一斉にカーバイト灯（今はアセチレン灯かな）に灯を付けます。少し赤味を持った青色の灯が輝きお店を照らします。カーバイドのガスが燃える特有の臭いが一面に漂い人々がそれに集まります、あたかも虫が明かりを求めて寄ってくるようです。何が売っていたか定かではありませんが、思い出すものは、カルメラ焼き、焼きそば？のソースの匂い、ブリキ、セルロイドのおもちゃ、ルーレットなどの怪しい当て物、さらに怪しげな、さびたナイフがピカピカになるメッキ磨き粉、外から透けて見えるレントゲン眼鏡……。

当時の子供達の遊びを紹介しておきましょう。

*めんこ

厚紙製の手の平大の長方形のカード型や丸い円形で、片面に武士、力士、野球選手などのスポーツ選手、怪獣、怪人などが多色で印刷されています。好きな種類のメンコを集めることをやりました。代表的な遊び方は自分のめんこを地面にたたきつけて相手のめんこをひっくり返すこと。できればそのめんこはもらえ、続けて挑戦できます。失敗したら次の番が来るまでめんこをそのままにして、次の人と交代。取られなければずっとそのめんこで勝負できますが、取られためんこは相手のものとなってしまいます。

*ベーゴマ

鋳物でできた小さいコマで紐の巻き方にもちょっとしたコツがいります。力入れ具合、紐の引き具合などいろいろ工夫することにより、強く、速く回すことができます。同じベーゴマでも回す人の技量によって回り方も全く異なります。私は下手でした。遊び方は通称《床》と呼ばれる土俵の上（バケツの上に厚い布を置くなど）で最後まで床の上で回っている、また相手のコマを外にはじき出し勝負します。

*ビー玉

これは皆さんも、今でもあるから知ってるでしょう。ガラスでできた丸い玉です。大きさは直径1～3cmぐらいで、色は単色のものや、中に模様が入ったものがあります。ビー玉は男の子の遊びで、女の子の遊びは「おはじき」というふうに別れます。ビー玉もおはじきも指で弾いて玉同士をぶつけ合う遊びです。

*釘刺し

道具は10cmぐらいの釘です。短い釘はやりにくいです。地面に刺した釘を相手の釘でそれを打ち倒したり、はじきとばす。また初めに描いた図の中に釘を刺し、そしてそれを囲う様に刺していきます。勝敗は互いに相手の行く手を塞ぎ、どんどん囲ってしまつてギブアップさせれば勝ちとなります。この遊びは分からないと思います。書いて説明するのは難しい遊びです。釘刺しはあまり固いところや、小石が転がっているような所は釘がはねて危険ですが やわらか過ぎても失敗しないのでおもしろくありません。今頃はほとんど舗装しているので遊ぶ場所はほとんどなくなりました。

*竹馬

2本の棒それぞれに足場を縄紐で括り付け、爪先が棒に当たる様に足場に乗、棒を掴んでいる手と足を共に動かして歩きます。一般的には竹で作られることから「竹馬」（竹製の乗り物）と言います。今はステンレススチールパイプにプラスチックの足場を備え

た竹馬？が売られています。

* 缶馬

竹がなかなか手に入りにくいということもあって、缶詰の空缶を利用して考え出したのが、竹馬ならぬこの缶馬です。空き缶に、荒なわやひも(1mぐらい)を2本通してゲタのようにはいて歩きます。これも今でもあるかもしれません。他に缶を使った遊びとして「缶けり」がありました。鬼は缶をけられないように隠れた人を見つけます。かくれんぼの変形とも言えるものです。

* 輪回し

自転車のリム(タイヤのない金属だけの輪)が使います。リムが倒れないように、棒きれでうまく転がします。リムの側面にミゾがあるので、そこへ棒をうまくハメれば、わりあい簡単に回せます。今でも、障害物競走のひとつとしてあるのではないのでしょうか。

* 馬跳び

馬跳びとは、一人の人が膝あるいはスネ、足首に手をついて前屈み(馬)になり、もう一人がそれを跳び箱のように飛び越す運動です。今でもよく体育の授業で行われるのではないのでしょうか。複数人の馬が一行になってそれを連続で跳び越したり、二人が交互に馬になって跳び越しあう方法などがあります。その他に「長馬跳び」4～5人で2チームになり馬側と馬跳ぶ側と別れます。一番目の馬になる子が、立っている子の股に首を突っ込んで下を向いて踏ん張る。二番目の馬の子は一番目の馬の子の尻の後ろから首を突っ込んでいく、以降、同じく前の馬の尻に次の馬が首を突っ込んで長馬を完成させます。馬跳びチーム側の子はその長馬の背に跳び箱の要領で馬の首に向かって跳ぶ。次々と跳びます。跳ぶ側が失敗して馬から落ちたら跳ぶ側の負け。跳び乗られて誰かがつぶれれば馬側の負けになります。今では危険で禁止かもしれません。

* チャンバラごっこ

「チャンバラ」という語は刀で斬り合う音を現す「チャンチャン・バラバラ」の略です。当時、時代劇映画が流行り、そのシーンを真似て子供たちが遊びます。刀(日本刀)を模した木切れや木刀、新聞紙を丸めたものなどを手に持って打ち合います。手拭を帯として腰に巻いてそこに刀をさします。最近では乱暴な遊びがあまり好まれなくなったためにめったに見かけられません。

* 映画

今では、コンビニ、スーパーなど買い物をするのでデパートは流行ませんが、当時は百貨店(デパート)は家族で楽しむ場所でした。百貨店の屋上のミニ遊園地に行き、観覧車、木馬

などに乗り、食事はそこの大食堂で食べた楽しい思い出があります。

当時はテレビがありませんでしたから、戦後の昭和20年～30年代前半は映画の全盛期時代でした。当初は白黒でカラーではありませんでしたが映画館はいつも混んでいました。当時はなぜか本編の映画が始まる前にニュース映画が必ず流されました。ニュース映画のナレーターは竹脇昌作の鼻にかかった独特のサビ声？と軽快な口調を覚えています。

今も「お笑い」は人気ですが、今はテレビが媒体ですがその頃は映画でした。戦後の暗い生活、人々は笑いを求めていたのです。お笑いといえばエノケン（榎本健一）、ロッパ（古川緑波）それにキングロウ（柳谷金語楼）三大喜劇人でした。記憶にあるのはエノケンの独特の声と歌、それに動きです。また時代劇、「チャンバラ映画」も人気がありました。「アラカン」と呼ばれた嵐寛寿郎の鞍馬天狗が記憶に残っています。「アラカン」が黒い頭巾を被り、白馬に乗って颯爽と現れると映画館の中はドット拍手です。当時の時代劇スターといえば阪東妻三郎、大河内伝次郎、片岡千恵蔵、市川右太衛門、長谷川一夫でした。調べてみると戦後の日本映画第1作は松竹の「そよ風」で、並木路子が歌った主題歌「リンゴの歌」とともに大ヒットしました。その後、次々と映画が製作されるようになり、1951年に黒澤明が『羅生門』でヴェネツィア国際映画祭グランプリを受賞したのを皮切りに、溝口健二が1952年『西鶴一代女』、1953年『雨月物語』、1954年『山椒大夫』と、映画の全盛期が続きました。

当時、カラー映画は「総天然色映画」と呼ばれていました。今ではカラーは当たり前ですが、当時は「総天然色」である事はその映画の一つの宣伝文句だったのです。見る側は白黒映画より豪華に思えたのです。私がいつ頃からカラー映画を見たか良く覚えていません。調べてみたら1951(昭和26)年、国産初のカラー映画「カルメン故郷に帰る」(脚本・監督：木下恵介)が封切られたとありました。記憶にありません。私の記憶に残っているのはディズニーの映画です。長編アニメーション作品はカラー作品でした。『白雪姫』、『ロビン・フッドの冒険』、『オズの魔法使』、『ファンタジア』などがありました。一番印象に残ってるのは「ファンタジア」です。この映画はオーケストラによるクラシック音楽をバックに、アニメーションによる物語です。映画には台詞は入っていませんでした（一部にあったかもしれませんが）。音楽が先にできたのに、まるでアニメが先に出来ているようでした。特にストラヴィンスキーの「春の祭典」に乗って、恐竜の闘い姿はいまだに強く記憶にあります。

しかし、当時の映画と言うと、私は一番に思い出すのは、兄に連れっけていってもらった渋谷の映画館で見た俳優ワイズ・ミュラーのターザンの映画です。その後、ターザン役をいろいろな俳優が演じましたがワイズ・ミュラー以外のターザンは思い出すことができません。今はアニメになっていますから知ってるかもしれませんが、ターザンは猿に育てられた人間で、ジャングルで活躍する映画です。私はストーリーをよく覚えていませんが、ジャングル

の中でターザンの「あ〜あ〜あ〜」の叫び声は覚えています。

*ラジオ

当時、家庭で娯楽といえばテレビがありませんからラジオです。ラジオドラマというと昭和22年(1947年)から昭和25年(1950年)まで放送された「鐘の鳴る丘」、同時期に「おらぁ三太だー」の掛け声で始まる「三太物語」、昭和26年に放送された「さくらんぼ大将」があります。一番覚えているのは「鐘の鳴る丘」です。このドラマはとがった屋根の時計台に鐘があり、復員してきた主人公が孤児たちと知り合い、共同生活を始め、明るく強く生きていく様子を描いたものです。「鐘の鳴る丘」というと、テーマソング、鐘の音ではじまり「緑の丘の赤い屋根 とんがり帽子の時計台 鐘が鳴ります キンコンカン メーメー子山羊も啼いてます・・・」、この歌を思い出します。この歌が町に流れる頃、子供たちは家に帰ります。日本中の子どもたちが聞いていたでしょう。いや、子どもたちだけでありません、敗戦で苦しい生活にうちひしがれていた大人たちも、このドラマによって、明日への希望を育てられていました。このドラマは大ヒットしました。その頃さらにヒットしたドラマがあります。「番組が始まる時間になると、銭湯の女湯から人が消える」というラジオドラマ「君の名は」という番組です。冒頭で「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」というナレーションが流れ、多大な人気を獲得しました。主人公のストールの巻き方が「真知子巻き」と呼ばれて女性の間で流行しました。ストーリーはすれ違いすれ違いの連続で母が、近所のおばさん達がじりじりしていたのが記憶にあります。主人公が再会を約束する数寄屋橋は今はありません。東京オリンピックの時に川は埋められ、高速道路が造られました。今では数寄屋橋公園となって、『君の名は』の原作者・菊田一夫の筆による「数寄屋橋此处にありき」の小さな石碑があります。

このように、戦後すぐにラジオから流行歌の「りんごの唄」が流れ、孤児の奮闘を題材にしたドラマの「鐘の鳴る丘」が始まりました。そして「美空ひばり」が出現し、ラジオドラマ「君の名は」の放送が開始しました。こうして将来、明るい社会になることを信じ、一步一步前に進み出していきました。海外の戦地で、沖縄で、広島で、長崎で、東京で、そして多くの場所で沢山の方々が戦争で亡くなりました。亡くなった方々は約300万人と言われています。その後、生き残った多くの方がたの努力で日本は再建され、今があります。私(お爺さん)の「戦争の頃の話」はこれで終わりです。

終わりに

皆さんの今の生活は、スイッチ一つでお風呂が沸きます。部屋も夏は涼しく、冬は暖かく空調がきいています。食べるものはあらゆるものがあります。食べたいもの、食べたい量、食べたい時に食べられます。車も、電車も速くなり、快適になりました。飛行機、船を使って海外にも自由に行かれます。そして、パソコンを使って知りたいことはすぐにわかります。携帯電話で話し、メールも出来ます。今は便利な過ごしやすい豊かな社会になりました。豊かになると人はさらに多くのこと、大きなことを望み、小さなことでは満足しなくなります。「お母さんと作った美味しいケーキ」、「お父さんで行ったカブトムシ取り」、「家族、みんなで楽しかったバーキュー」、「先生、先輩、本からの心に沁みる一言」、「友達から届いた手書きの手紙」、「キャンプでみた美しい星空」・・・幸せなこと、素晴らしいことは皆さんのすぐそばに小さな、小さなことの中にあることを忘れないでください。

人は時代の上に人生を築いていきます。戦争の時代は自分の人生を選択することは出来ませんでした。皆さんの時代は違います。自分自身で人生を選択し、進むことが出来ます。皆さんの選んだ道が素晴らしい人生になることを祈っております。

20世紀は「戦争の世紀」と呼ばれています。20世紀は2つの世界大戦を経験しました。欧州が中心だった第1次世界大戦（1914～18年）と、欧州とともにアジア、太平洋まで拡大した第2次世界大戦（1937～45年）です。日米戦争は第2次世界大戦の一部です。この2つの世界大戦では約7千万人が死亡しました。第2次世界大戦が終わった後の冷戦期間中も、中東、アジア、アフリカで戦火の絶えることはありませんでした。20世紀の後半にも多くの戦争で人は亡くなりました。その結果、20世紀では約1億人以上が亡くなりました。19世紀までは戦争で亡くなった方は、主に軍人でしたが、20世紀は多くの民間人が犠牲になりました。これは飛行機の進歩で軍用機の時代になり、人々を無差別に爆撃し、殺戮兵器も運搬しやすい小型化、軽量化に、殺戮の力も強力になり、一発で何十万人も殺せる原爆へと進歩？した結果なのです。20世紀は「戦争の世紀」と呼ばれる所以です。皆さんが生きる21世紀は「平和の時代」と呼ばれる世紀になるように願っております。

今年は日米戦争が終わって70年になります。今、戦場に行き戦争を語ることができる人はほとんど残っていません。戦争を体験して話せる人も終戦の年の時、私のような4歳が最後ではないでしょうか。皆さんがこれを読まれる頃はその人々もいなくなっていることでしょう。たまにはお爺さんのことも思い出してください。今まで読んで頂いて、ありがとうございました。

以上

「本資料は孫に書いた家族版「戦争の頃の話」から家族の話を削除しまとめたものです」

追記

・友人に私のこの拙文を送ったところ、彼からお孫さんに「戦場の事」も知ってもらったと言われました。しかし幸いにも私は戦場体験がありません。戦場、戦争の体験は以下に紹介する本を読んでください。皆さんと同じぐらいの年齢の特攻の本を選びました。特攻隊員は敵艦船に体当たりし自爆します。特攻は敗戦が濃くなる終戦の前の年から始まりました。終戦・玉音放送の日に飛び立ち亡くなった隊員もいます。私の本棚（読む頃にあるかな？）にありますので読んでください。

1、「新版 きけわだつみのこえ」日本戦没学生の手記・（岩波文庫）

2、「第2集 きけわだつみのこえ」日本戦没学生の手記・（岩波文庫）

戦没学生の遺書です。太平洋戦争後期から一般の大学生が徴兵されました。10代・20代の若者が特攻隊に「志願」させられ、飛行機ごと、敵陣に突っ込んで「玉砕」しました。冒頭に掲載された上原良司氏。沖縄嘉手納湾の米機動部隊に突入戦死。享年22歳。

私は2冊とも最後まで読んでいません。読めませんでした。

3、「指揮官たちの特攻・幸福は花びらのごとく」・城山三郎著（新潮社）

特攻隊第一号に選ばれ、レイテ沖に散った若者。敗戦を知らされないまま、玉音放送後に「最後」の特攻として沖縄へ飛び立った若者。共に享年23歳。帰りを待つ母の祈り。

4、「妻と飛んだ特攻兵 8. 19満州、最後の特攻」豊田正義著

玉音放送から4日後の8月19日、ソ連軍が侵攻する満州国で特攻隊の11機が飛び立ちました。そのうちの2機には夫と妻（恋人）と一緒に乗り逝ました。享年22歳。

5、「黒い雨」井伏鱒二著（小説）

広島に原爆が投下され、放射能を帯びた黒い雨が降ります。その雨の中を人々はさまよい歩く。原爆病に蝕まれていく苦しみと不安の日々。被爆者の日記に基づいた小説です。

6、「少年H」上・下・妹尾河童著（講談社）（小説）

著者が終戦を迎えたのは中学3年の15歳。生まれ育った神戸を舞台に戦中、戦後の時代を駆け抜けた少年Hの物語。著者自らの少年時代を振り返った自伝的作品です。

7、「終わらざる夏」上・下・浅田次郎著（集英社）（小説）

8月15日に北のさいはての島で、日本軍とソ連軍が、壮絶な戦いが始まります。翻訳者、学生、女子挺身隊など様々な立場の人々が戦争に巻き込まれていきます。

8、「アンネの日記」アンネ・フランク著（文春文庫）

戦争は日米だけではなくありません。第二次世界大戦はドイツ、イタリア、フランス、イギリスなどヨーロッパでありました。13歳から15歳のナチ占領下での日記です。

9、「ぼくらの先輩は戦争に行った」井上ひさし監修

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパステクニカルライティング教室（講談社）

大学のゼミで、学生が戦争から帰還した先輩を訪問し、インタビューしまとめた本です。まさしく、戦場を体験したお爺さんと孫の対話です。31人の学生が書いています。

以上